
ブラックベリー・オン・ザ・ショートショート

中び連会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックベリー・オン・ザ・ショートショート

【Nコード】

N0487L

【作者名】

中び連会長

【あらすじ】

ブラックな味わいのショートショート詰め合わせ。

百万人目の奇跡

その日、朝日が地平線から顔を覗かせると共にねぐらを引き払った私は、いつもの仕事に取りかかろうと、暗然たる足取りで街に出た。

曇り空を仰いで大きくため息をつき、ふと足元に視線を落とすと、道端の荒れ放題の茂みの中に膝丈くらいの高さのボロボロに朽ち果てた小屋が、ひっそりと佇んでいるのが何とはなしに目に付いた。

小屋の中には一体の古い地蔵があった。

自分を取り巻くこの世の中に対してとくに諦念の境地に達し、敬虔な信仰心など毛ほども持ち合わせのない私だったが、虫の知らせというヤツだろうか、この時ばかりは素直に神頼みをしてみる気になった。

己の不毛な行為に内心苦笑を浮かべつつ、両の手を合わせて目の前の地蔵に祈っていると――突如私の身体の芯を、これまで体験したことのない奇妙な感覚が貫いた。

『……信仰厚き人間よ、喜ぶがよいぞ』

奇妙に甲高い、大人とも子供ともつかない尊大な口ぶりの声がした。その声はどこから聞こえているものではなく、私の頭の片隅でうわんうわんと反響している風だった。

誰だ、一体誰が私に呼びかけている？ 心臓が早鐘のように鼓動を打ち始めるのを自覚しながら、きよろきよろと辺りを見渡していると、

『ここじゃ、ここじゃ。わしはそなたの目の前におるではないか』
目の前だと？ 目の前には地蔵しかないが……まさか。

『そう、そのまさかじゃ。わしはこの地一帯をいにしえより守護してきた地蔵尊じゃ』

私は大きく深呼吸して自分を落ち着かせた。幻聴ではなさそうだった。

「信じられないが、どうやら信じるしかなさそうだな……で、その地蔵尊とやらが私に何の用なのだ」

『神であるわしに向かつて、何たる無礼な口の利きようよ。まあよい、それはともかく喜ぶがよいぞ人間よ』

「喜ぶ？　どういうことだ」

『そなたは誠に運がよい。そなたはわしがこの地に安置されてから、ちょうど百万人目にわしを拝んだ人間なのじゃ。これも何かの縁。ゆえに、その記念にささやかな功德を授けてやろうと思うてな』

「功德？」

私は思わず身を乗り出していた。溺れる者は藁をもつかむ、という諺ではないが、今のクソ面白くもない状況を少しでも凌げるものなら、どんな話でも大歓迎だった。

『そなたに一つ、力を与えよう。掌を握って力を込め、目を閉じてひたすら念じてみるがよいぞ』

私は地蔵に言われた通りにした。しばらくして、掌にずしりと重い感覚が生じた。生唾を呑み込みながらゆっくりと掌を開くと、そこには一枚の小判が金色の輝きを放っていた。

「……これは？」

『それがお主の力じゃ。一日一回、こうして念ずるだけで小判が一枚出るといふ訳じゃ。どうじゃ、嬉しかろうて』

無邪気にそんなことを言う地蔵に、私は思わず口を死んだ貝みたいにぽかんと開けて、しばし呆然と立ちつくしていた。そして我に返った後、私の肚の底にくすぶっていた怒りとも苛立ちとも失望ともつかない感情の炎が、勢いよく燃え広がりました。

「こんなふざけた力なんか、もらっても嬉しくも何ともない。もっとマシな力はないのか？」

私は一縷の望みを託して問いただしたが、

『てつきりわしに感謝するものだとはかり思ったが……やれやれ、お主は何とも欲の深い人間よのう。一日に小判一枚では足りんと申すのか。力など与えるのではなかったわい。では、さらばじゃ』

地蔵はいたく落胆した様子でそう言う、なおもぶつくさ呟きながら気配をフェードアウトさせていった。

私は「くそっ」と叫んで、手の内にある小判を腹立ち紛れに地面に叩き付けると、ついでにもはや物言わぬ地蔵を思いつき蹴倒した。

一日に小判一枚を生み出す力。なるほどかつての自分だったら、まるで宝くじの一等に当たったように降って湧いたこの僥倖（ごうじつ）に心から感謝し、躍り上がって喜んだことだろう。だが今となっては——十数年前に起きた第三次世界大戦の結果、乱れ飛んだ中性子ミサイルで世界中の人間が蒸発しきった今となっては、こんな力に何の意味があるというのだ。

私は地に伏している役立たずの地蔵に最後の一瞥（いちべつ）をくれ、やおら背を向けた。街のどこかに今も残っているであろう、ひよっとしたら地上最後の人類かも知れない私の命を明日へと繋ぐための保存食を探す、いつもの孤独な仕事に戻るために——。

戦争と平和

私が行き来する二つの国の間で、戦争が起きた。

きっかけは、国境を挟んだ村同士の農業用水の使用権を巡る争いという些細なものであったが、両国の国境警備隊の交戦というかたちで一度灯された憎しみの炎は、時を措かずして燎原の火のように燃え広がった。

両軍は短期決戦を目論んだようだったがその当ては外れ、戦いは膠着戦と化した。戦線には幾重もの塹壕が掘られ、方々から徴兵された人間たちの命を貪欲に呑み込んでいった。

両軍は時々、思い出したかのように敵陣に呐喊する。塹壕から地虫のようにのそのそと這い出した兵士たちが、銃剣突撃する間もなく敵の榴弾砲やら機関銃やらで薙ぎ払われ、血飛沫と肉片を空中に汚らしく撒き散らしていく様は、全くもって痛快な見せ物だった。

腹の破けた若い兵士が、母親や恋人の名前を涙混じりに叫びながら、外に飛び出た赤黒い臓物を必死に中に押し込もうとしているのには、大いに笑わせてもらった。

戦争が始まって二年目。いつは果てるともない一進一退の戦いに業を煮やした一方の軍首脳部が、可動兵力の大半を集中して大攻勢を仕掛け、遂に敵陣を突破して首都近くまで迫ったものの、ゲリラ戦を展開した敵軍の必死の抵抗に遭い、敵の援軍に延びきった突出部をしたたかに叩かれて這々の体で撤退していったことがあったが――その一部始終を見ていた私は、同じ種族同士でよくもまあここまで残虐に殺し合えるものだ、と、ある意味ほとほと感心した。

進軍先の街や村は、例外なく殺気立った兵士たちの略奪に晒され、男や老人や子供は遊び半分に殺され、女は性欲の捌け口にされた。侵略軍が撤退していくと、復讐心に猛り狂った市民や村人は逃げ遅れた敵兵を捕らえてリンチにかけ、それまで自分たちがされたことを倍にして返していった。

五体をありとあらゆる方法でめちやくちにされ、惨めに死んでいく人間たちを見ていて飽きることはなかった。

戦争末期、両軍は新兵器の毒ガスを開発した。両軍は最初のうちこそ使用を躊躇^{ためら}ってはいたが、追い込まれた一方が一旦使ってしまった、後は際限ない報復措置の応酬戦である。

超長距離砲で前線から遠く離れた後方の街に撃ち込まれた毒ガスは、非戦闘員の市民たちを根こそぎ殺傷し、両国の生産力をみるみるうちに削^そいでいった。

両国とも総人口の半数近くを喪失し、私が随分人間が減ってさっぱりしてきたなと思ったところで、両国民の間によりやく厭戦^{えんせん}ムードが湧き上がってきた。国民の声に押された両国政府は国境線上にしつらえた小屋で会談を持ち、終戦協定を締結したのである。

やれやれ……これで私を退屈させなかった楽しい見せ物ともおさらばという訳か。残念だ、とても残念だ。

だが、どうせ奴らのことだ。ある程度悲惨な記憶が薄れてきたら、また何らかの口実を見つけて殺し合いを始めるだろうさ。願わくはそれが私の寿命があるうちに起きてほしいものだ——私はそう祈りつつ、終戦協定の会談場所から身を翻していった。

「おや」

協定書に署名をしていた国家元首が、ふとペンを持つ手を止めた。「どうかなさいましたかな？」

テーブルの向かいに座っていたもう一方の元首が尋ねた。

「いや、大したことではないのですが……先ほどまでその窓から見える木の枝に白い鳩が止まっていて、私の方をじっと見ていたような気がしたのです」

「終戦協定の締結という記念すべき時に、よりによって白い鳩とは——もしかして我が国と貴国の未来を暗示しているのかも知れませ

んな」

もう一方の元首は重々しく頷きながら立ち上がり、希望に満ちた顔で高らかにこう宣言した。

「我々はその鳩にかけて、今この場所で誓おうではありませんか――
不幸な試練をくぐり抜けた両国の、これからの永久とこしえの平和を」

戦争と平和（後書き）

物語の都合で改変しましたが、実際には鳩は一ヶ所にとどまる留鳥です。御了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487/>

ブラックベリー・オン・ザ・ショートショート

2010年10月8日14時21分発行